

## コミュニティで支えあい、学びあう

坂無 淳

(元コミュニティ政策学科教員)

私は2013年4月から2017年3月までの4年間、立教大学コミュニティ福祉学部コミュニティ政策学科に助教としてお世話になった。先日の卒業式の際、コミュニティ政策学科の卒業生の前で挨拶する機会を頂いたのだが、考えてみれば彼／女たち、学部生が入学し卒業する同じ4年間を私も立教大学の新座キャンパスで過ごしたことになる。大学生の4年間といえば、自分の学生時代のことを考えてみても、様々な経験をし、大きく成長する期間だと思う。本稿を書くという貴重な機会を頂き、自身のこの4年間を振り返ってみると…様々な経験を積みさせていただき、本当に充実した時間を過ごすことができたと思う。

私は新座キャンパスのチャペルで毎週月曜に行われている夕の祈りに、できるだけ参加するようにしていた。それはキャンパスの中央にあり、大学や新座キャンパスのシンボルでもあるチャペルに週に1度くらいは足を踏み入れようという理由とともに、週の始まりで個人的にも授業が多く慌ただしい月曜の終わりに、ふと落ち着いた時間を持つことができたという理由からである。その月曜夕の祈りでチャプレンが読み上げる中に、毎回ではないのだが、また正確な文面も覚えていないのだが、印象深い内容が2つあった。まずは、今日1日の勉強や仕事を無事終わらせることに感謝するという内容である。そして、もう一つ私の印象に残っているのは、これから夜も働く人をお守りくださいという内容である。慌ただしい月曜を過ごし、やっと一息つくことができると私は自分のことを考えていた。しかし、そう言われてみれば、例えば大学のキャンパスでは門衛所の方々がこれから夜も勤務をする。大学の前の道路では夜間に工事を行っていた。志木や池袋などの街ではこれから働く人もいる。自分の1日を無事終わられたことに感謝するとともに、これから働く人たちも無事にそれぞれの仕事を終わることができるように。自分のことだけではなく少し視野を広げられ、また、自分の生活が周囲の人たちの生活にも支えられていることに気づかされた。

そして今、私は立教大学コミュニティ福祉学部での4年間の勤務を終える。今、顔を思い浮かべることのできる大学や地域の方々、また家族などだけでも、多くの人に支えられて、無事にその勤務を終えられたと感謝している。

---

同じコミュニティ福祉学部の先生方、学部の事務室や教務課など事務の方々には、大変お世話になり、また親切に仕事を教えていただいた。教育では、社会調査実習、フィールド・スタディ、基礎演習、統計学入門、リサーチ方法論2、データ分析法、ファシリテーション論、コミュニティ福祉学などの科目で学生と交流することができた。社会調査実習では、同じく科目を担当する先生方や池袋の社会情報教育研究センターの方々と協力し、大きな問題なく運営できたことに安心している。研究では、大学の恵まれた制度で多くの学会に参加し、分析や論文の執筆の時間を取ることができた。投稿論文の査読コメントに対して深夜まで研究室で修正の原稿を書いたのも良い思い出である。また、新たに地域に関するテーマに取り組んだり、他の先生方の研究に参加させて頂くなど、刺激を受けることが多かった。学内業務では、この雑誌を発行するコミュニティ福祉学会「まなびあい」で運営委員をさせて頂いたが、卒業生がボランティアで運営に関わっていることに感銘を受けた。コミュニティ福祉研究所では1年ではあるが運営にも関わらせていただいた。また、東日本大震災復興支援室では宮城県石巻市を中心に先生方や学生と支援活動に参加した。自分の時間とお金を使って支援活動をする学生には、教えられることの方が多かった。

この4年間で充実していたと思えるもう一つの理由は、プライベートでも多くの幸せなことがあったためである。上の子は新座に来た時は0歳であったが、本稿を書いている今はもう5歳になった。また、新座では下の子が生まれた。妻が切迫早産で大変な時期もあったが、北海道や愛知の家族、地域の方々にも助けられ、無事に生まれ、その子もう3歳になった。職場も住居も新座だったため、大切な思い出が新座にはたくさんある。新座を離れるのは寂しいが、自分のいくつかある「地元」の一つとして、これからも新座のことは決して忘れないと思う。

最後に改めて、皆様にお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。そして、今後ともどうぞよろしく願いいたします。